

中米の遺跡におけるフィールド・ワーク

福井 理恵

人間社会環境研究科 博士前期課程1年

1. はじめに

今回、筆者は平成24年度フィールド・マネージャー派遣プログラムによって、マヤ文明圏であるグアテマラ、ホンジュラス、メキシコへ8月10日～9月24日の46日間派遣された。

マヤ文明はA.D.250～900年の古典期(Sharer & Tlaxler2006:287)を中心に、紀元前から16世紀にスペイン人が侵入してくるまで、長きにわたって盛衰した古代文明である。その特徴としては、金属器をほぼ使わなかった石器の文明であること、大型家畜や荷物を引くための車輪が存在しないこと、高度な文字体系を持つこと、天体観測に基づいた現代にも引けを取らない正確な暦を持つことなどである。マヤ文明圏は現在の国では、グアテマラ、ホンジュラス、メキシコ、ベリーズ、エル・サルバドルの中米5か国にまたがっている。

数多く存在するマヤ文明の遺跡の中でも今回筆者が

フィールド・ワークの対象として訪れたのは、ティカル遺跡(グアテマラ)、コパン遺跡とその周辺衛星都市遺跡(ホンジュラス)、キリグア遺跡(グアテマラ)、テオティワカン遺跡(メキシコ)(図1)である。ティカル遺跡では、今年度から金沢大学国際文化資源学研究センターの中村誠一教授をディレクターとして始まった「北のアクロポリスプロジェクト」の調査に参加した。また、各遺跡での遺跡利用や保存についても着目しながら、マヤ文明遺跡でのフィールド・ワークの方法を習得することに努めた。

以下では、コパン遺跡、ティカル遺跡、テオティワカン遺跡という今回訪れた主要3遺跡について活動を報告する。

2. 活動内容・成果

I コパン遺跡

滞在地:コパン・レイナス

滞在期間:8月11日～8月25日(15日間)

目的:今後マヤ文明をフィールド調査するにあたって、コパン遺跡やその周辺の衛星都市遺跡、およびコパンと関係が深いとされるキリグア遺跡の現状を把握する。(図2)

コパン遺跡(写真1)はホンジュラス西端、グアテマラ国境から12kmほどのところに位置している。一方でマヤ文明圏では南東端に位置する。熱帯サバンナ気候に属するコパン谷のほぼ中央に遺跡中心部があり、その東側をコパン川が流れる。標高は700メートルほどでグアテマラ北部などのマヤ文明低地地域よりは高い位置にあるので、気温も平均23度前後と比較的過ごしやすい(Turner II, et al.:1983)。

コパンはマヤ文明圏では南東に位置するが、古典期にはマヤ地域有数の強力な都市国家へと発展し、周辺都市への影響力を持ち続けた。数百年間の繁栄の中で、



図1 マヤ文明地域 (Braswell2003p.2 FIGURE I . I)



図2 コパンとその周辺遺跡の位置関係



写真1 コパン中心部、神聖文字の階段と球戯場



写真2 石碑A

独特な芸術様式が発展し、立体浮彫の石碑（写真2）やモザイク石彫（写真3）がその代表である。1980年に世界文化遺産に登録されている（古田2008）。

コパン谷への人間の居住が始まったのは紀元前1400年ごろ（中村2007）であるが、古典期の繁栄を築いた王朝が創始したのは、426年、ヤシュ・クック・モによる。その後、コパンの勢力は拡大し、820年ごろ最後の王が死ぬまでに16代の王が確認されている。（Sharer, Traxler 2006）

コパンでは、古代マヤ人による歴史がある一方で、19世紀から現在まで続く考古学調査の歴史も語られるに値する。1830年代にフアン・ガリンドやジョン・ロイド・スティーブンス&フレデリック・キャザウウッドらの探検により、コパン遺跡が欧米に紹介されて以来、1890年代のアルフレッド・モーズレーから始まるハーバード大学ピーボディ博物館の調査、1930年代-1940年代のカーネギー研究所の調査、1970年代-1980年代のホンジュラス政府が後援したコパン考古学プロジェクト（PAC I、II）、1988-1996年にはウィリアム・ファーシュやロバート・シャーラーによるコパン・アクロポリス考古学プロジェクトが行われた（Andrews and Fash 2005）。

このように、さまざまな考古学プロジェクトがコパン遺跡では実施され、マヤ地域でも有数の考古学調査の進んだ遺跡となった。こうして学術的にコパン遺跡での政治、文化、社会が少しずつ明らかにされてきたわけだが、その一方で、調査の痕跡は目に見える形で現在に数多く残されているというのが、実際に遺跡を訪れてみての印象である。

例えば、コパンのアクロポリス最大の目玉の一つである、神聖文字の階段である。神聖文字の階段には、階段を構成する石材それぞれに碑文が刻まれていて、16世紀以前に記された碑文の中では最長である。現在、この階段には保護のため覆いがかけられている。（写真4）

一方、コパンの中心部から東に1kmほど行くと、ラス・セプトゥーラスという貴族の居住地だったと考えられている遺跡がある。そこにも、神聖文字の階段と同じような光景を見ることができた。（写真5）

これは、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所とハーバード大学が共同で調査した、神聖文字の階段の覆いを5分の1のスケールで再現したものである。覆いは4種類の異なる材質を使用して作られ、その効果や環境に関して1年間のモニタリング調査が行われ



写真3 モザイク石彫（建造物9 L-10）



写真4 神聖文字の階段（建造物9 L-26）



写真5 ラス・セプトゥーラス建造物9 N-83



写真6 東広場ジャガーのトンネル発掘坑内部

た。

また、アクロポリスの神殿などの巨大建造物に空けられた発掘トンネルも、コパンにおける考古学調査の痕跡の一つである。過去の建造物を覆うように後の建造物が増築されるという、マヤ文明の建築の特色のために、一般的な垂直方向への発掘とは異なり、水平方向へ掘り進むトンネル発掘がマヤの遺跡では行われている（写真6）。特にコパン遺跡では、建造物9 L-16の内側にあるロサリラ神殿のように、破壊されることなくほぼ完全な形で後の建造物に覆われた神殿がトンネル発掘によって確認されている。

現在、ロサリラ神殿へのトンネルと、隣接するジャガーのトンネルは遺跡への入場料とは別に見学料をとって、観光資源として活用されている。

そして今回、筆者は本学の教授であり、コパン考古学プロジェクト（Proarco）のディレクターを務める中村誠一先生の許可を得て、Proarco で発掘され、筆

者が訪れた時点で一般には未公開であった9 L-22、23 グループの見学および、コパンの考古学研究所で遺物観察することができた。そうすることで、発掘された遺物がどのように収蔵されているか、コパン遺跡での遺物観察ではどのような手順を踏んでいけばよいかを学ぶことができた。この考古学プロジェクトにおける調査の契機の一つも以前の考古学調査の痕跡によるものである。1969-1970年に実施されたヌニェス・チンチージャによる同グループの調査では、遺跡の保存・修復を考慮していなかった。そのため、遺跡には機械を使った大規模な発掘跡が建造物を分断するような形で残されている。（写真7）それを再調査、修復・保存するというのが、Proarcoの目的の一つであった。（PROARCO2003）

これらのように、コパンには良くも悪くも様々な考古学の歴史を語る痕跡が残されている。それは、古代マヤ人によるものであるという遺跡の文脈を損ねるも



写真7 建造物を破壊したような発掘跡(9L-23グループ)

のであるかもしれないが、一方でマヤ有数の遺跡調査という文脈で大いに観光資源や教育資源として活用していけるものであると考える。ただし、現在、コパン遺跡では、そのような調査による痕跡が遺跡と同化していて、古代マヤ人によるものなのか、現代の調査の結果なのか、一般の人には区別しづらい箇所が多い。遺跡自体はマヤ人が作った建造物であるが、後世の人によって、どのような手が加えられて、どういう経緯で今、人々の前に見えているような状態になっているかという視点での説明がもっとあっても良いはずである。コパンでは、各建造物や石碑に関する案内板は、説明も比較的充実しているので、考古学や修復・保存についての文脈もより重視されれば、遺跡への理解も違った見方ができるかもしれない。

コパン遺跡を訪れる、ほとんどすべての人が滞在する場所が、コパン・ルイナス(コパン遺跡村)である。コパン遺跡から車で10分ほどのところにある。筆者も2週間この村に滞在したが、ホテル、土産物、飲食店など、観光客のためのものがそろっている。また、住人もコパン遺跡で働いている人が多く、コパンの遺跡調査や観光地としての発展とともに発展してきた。世界遺産であるコパン遺跡の維持・運営を支え、遺跡によって雇用が創出されて生活が成り立つという循環が成立している。

筆者はスペイン語の勉強のために、コパン・ルイナスにあるスペイン語学校に通った。コパンには2ヶ所スペイン語学校があり、観光客やマヤ文明研究を始めた学生、主にコパンに住む欧米人の子供たちのための学校で働く教師など、様々な人が受講していた。講師はコパンに住んでいる地元の人なので、会話の中で現地の文化や思想に触れることができたのは良い経験となった。

II ティカル遺跡

滞在地：フローレス

滞在期間：8月26日～9月15日(21日間)

目的：金沢大学ティカル北のアクロポリスプロジェクトにおいて、測量調査に参加する。

ティカル遺跡は、グアテマラ北部ペテン県の県都フローレスから、64キロのところに位置している。マヤ文明に関する遺跡の中で唯一の複合遺産として、1979年にユネスコ世界遺産に登録された(古田2008)、マヤ低地最大級の都市である。最も人口が多かった700年ごろには、65平方kmの範囲に何千もの住居が建設された(Harrison1999)。現在はその中心部16平方kmが主に調査されている。

ティカルへの居住は紀元前800年ごろに始まり、王朝は紀元1世紀ごろには創始し、その後10世紀まで800年間ほどの間に、33人の王が存在したと考えられている(中村2007)。26代目の支配者、ハサウ・チャン・カウィールがティカルを統治した7世紀末から8世紀初頭にもっとも繁栄し、都市中心部のグラン・プラザ(大広場)にそびえる神殿1と神殿2もこの頃造られた。(写真8)

ティカルが欧米に紹介されたのは1848年のモDEST・メンデスとアンブロシオ・トゥットの記録を出版したものによる。その後、1880年代のアルフレッド・モーズレーによってティカルは広く欧米に知られるようになった。次にティカルへ入ったのは、ハーバード



写真8 ティカル、神殿1



写真9 北のアクロポリス



写真10 建造物5D-35 (木や草に覆われている)



写真11 倉庫建設予定地

大学ピーボディ博物館のテオベルト・マーラーである。彼が住んだという中央アクロポリスの建造物には、その署名が刻まれ「マーラーの宮殿」と呼ばれている。

そして、1910年代～1920年代には、カーネギー研究所のシルヴェイナス・モーリーが特に碑文についても焦点を当てながら研究を推し進めた。ティカルに関する考古学プロジェクトで最も重要なのは、1956年から1969年まで実施されたペンシルヴァニア大学博物館によるティカル・プロジェクトである。これは後に、ティカルに限らず様々なマヤの遺跡において採用される考古学調査の基準を作った、現在にもかなり大

きな影響を与えているプロジェクトである。北のアクロポリスやグラン・プラザ、中央アクロポリスをはじめ、測量、発掘、修復などが大規模に実施された。1979年には、グアテマラ政府による考古学プロジェクトで、「失われた世界」という先古典期中期の居住を確認されているエリアが調査された。また、神殿5は2003年までスペイン開発庁とグアテマラ共同で修復が行われた。(Harrison1999)

2012年、金沢大学はペンシルヴァニア大学以来のティカルでプロジェクトを実施する大学となった。北のアクロポリスプロジェクトでは、ディレクターの中村誠一教授、およびグアテマラ人共同ディレクターのアレクサンデル・ウリサル氏のもと、北のアクロポリス(写真9)の一角である建造物5D-35(写真10)の測量、マッピング、発掘が目下の目的である。

今回、筆者が参加した調査日について調査日誌をもとに以下に詳細を述べる。

- ・ 8月27日 ティカル関係各所へ挨拶回り、遺跡見学
- ・ 8月28日 グランプラザ測量
- ・ 8月29日 建造物5D-35のグランプラザ側斜面測量
- ・ 9月4日 西のプラザ測量
- ・ 9月5日 博物館見学
- ・ 9月6日、7日 西のプラザ測量
- ・ 9月10日、11日 西のプラザ測量
- ・ 9月12日、13日 北のアクロポリスプロジェクト倉庫建設予定地測量

測量調査は、JICA青年海外協力隊員今泉和也氏の指導のもと、光波によるトータルステーションを使って、地図作成のための点を取った。建造物5D-35に隣接している広場ということで、グランプラザの建造物の外枠、および、5D-35の西側に位置する西のプラザの平面、西のプラザを形成するマウンド、西のプラザを横切る道を測量していく。また、北のアクロポリスプロジェクトの機材などを置くための倉庫が西のプラザより西側に建設されるということで、その予定地(写真11)の平面および周囲のマウンドを測量し、地図化するためのデータを集めた。実際に遺跡での連日の測量調査によって、トータルステーションの設置の仕方、操作方法、プリズムの置き方などを学ぶことができた。

今回、筆者は、世界複合遺産という遺跡を調査するという困難さを実感した。文化遺産というだけでなく、自然遺産ということで、一面に生い茂る木々や草花を保護しなければならないと厳しく決められている。自然遺産でなければいくら植物を伐採しても良いというわけではないが、ティカルの場合は、調査を妨げる最低限の植物を排除することも基本的には許されていない。したがって、グランプラザのような開けたところならまだしも、西のプラザやその周辺の木々に覆われたマウンド、倉庫建設予定地の測量では、光波の進路を植物に遮られてしまうことが多い。植物を傷つけないように一時的に手で押さえたりするものの、計測できなかった地点も多く残っている。

今回、金沢大学のプロジェクトに参加することで、マヤ文明の世界遺産に毎日通い、調査をするという貴重な経験を積むことができた。筆者が参加したのは、まだプロジェクトが始まってすぐの一部分でしかないが、今後、より本格化していくというところなので、頻繁にティカルへ赴く機会を得られればと考える。

Ⅲ テオティワカン遺跡

滞在地：メキシコシティ

滞在期間：9月16日～9月22日（7日間）

目的：マヤ文明と交流があったと言われるテオティワカン遺跡を見学し、遺跡の状況をマヤ遺跡と比較検討する。また、マヤの遺物も多数所蔵する、メキシコ国立人類学博物館を見学する。

テオティワカン遺跡はメキシコシティから車で40分ほどのところに位置している。紀元前1世紀ごろ勃興し、3～4世紀には最盛期を迎えた、メキシコ中央高原の大都市遺跡である（杉山2001）。1987年ユネスコ世界文化遺産に登録されている（古田2008）。同時代、古典期前期であったマヤ地域や後世のメキシコ中央高原のアステカなどに影響を与えている。

テオティワカン遺跡のマヤに対する影響といえば、まず、建造物様式であるタルー・タブレロである。垂直な面と、傾斜した面によって建造物の壁面が構成されるこの様式は、テオティワカン遺跡（写真12）のいたるところで見られる特徴的な様式だが、それはティカル遺跡（写真13）の一部の建造物にも見ることができ、テオティワカン人とマヤ人の接触があったということへの指標の一つとなっている。写真12と写真13を比較すると、かなり似た作りになっている



写真12 テオティワカン遺跡のタルー・タブレロ



写真13 ティカル遺跡のタルー・タブレロ



写真14 月のピラミッドからのテオティワカン遺跡

ことが確認できる。

また、遺跡の現状に関して述べれば、テオティワカン遺跡のほうは、かなり観光地化が進み、遺跡の整備もしっかりとしている（写真14）というのが、筆者の印象である。マヤ遺跡では、まだ発掘されていない、または半分だけ発掘し、半分は保護のため手を付けずに残しているという建造物が、土や草に覆われたマウンドとして見られるということが多い。しかし、テオティワカン遺跡では、それはほとんど見られない。これは、雨が降りやすい熱帯低地のマヤと、乾燥した高地のテオティワカンという気候の違い、および植生の

違いが大きな原因を占めていると筆者は考える。そして、それに加えて、メキシコシティという大都市からすぐの立地という点でも観光地として発展しやすい要因である。コパンやティカルへ行くためには、ほぼそのためだけに遺跡付近の滞在地まで各国首都から数時間かけて赴かなければならないというアクセスの違いも重要な点だと考える。実際、世界中どこにでも観光に行くような日本人も、コパンやティカルではかなり少ないが、テオティワカンでは、団体旅行含め、どこを向いても日本人という状況であった。

3. 今後の展望

このフィールドマネージャー養成プログラムによって、今回筆者は、本文中で主に触れた世界遺産3遺跡以外に、コパン周辺のエル・プエンテ遺跡、リオ・アマリージョ遺跡、グアテマラの世界文化遺産であるキリグア遺跡、メキシコシティ内にあるテンプロ・マヨール遺跡といった、各地域、時代の遺跡を訪れることができた。また、それぞれの遺跡では、出土した遺物を収蔵する博物館にも訪れている。博物館が複数に分かれている遺跡や（一つは石彫博物館、もう一つはそれ以外の土器などの遺物といったような）、一つの博物館にすべてまとまっているところや、規模も小さいものから大きいものまで様々である。世界遺産4か所だけを取り上げて、各遺跡の立地、管理する国や研究機関の体制によって遺跡の運営には大きな差が出てくるということを実際に理解することができた。各地域それぞれの持つ何らかの問題点によって、現在はそうならざるを得ないという場合も多いが、その解決方法も含め、各地域にとって最適な遺跡利用があるのだと気付いた。それに伴い、フィールド調査する際には、一律に同じでいつもうまくいくというわけではなく、各遺跡に適したフィールド調査の方法があるはずであり、それを模索し、実行することが重要なのではないかと考える。

今後は金沢大学が調査を開始したティカル遺跡と、コパン遺跡において調査に参加し、今回気付いた視点も踏まえつつ、経験を積んでいきたい。

謝辞

今回の調査を行うにあたり、多くの方にご支援、ご協力をいただきました。特に、中村誠一教授、アレクサンデル・ウリサル氏、今泉和也氏、コパンのカルロ

ス・カルバハール氏、金大マヤ文明研究の大学院生両氏、各遺跡職員の皆様、コパンおよびフローレスのホームステイ先の家族には大変お世話になりました。この紙面を借りて、厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 杉山三郎「テオティワカンにおける権力と抗争」『古代文化』第53巻第7号、2001年。
- 古田陽久 監修『世界遺産辞典—878全物件プロフィール—2009改訂版』シンクタンクセとうち総合研究機構、2008年。
- 中村誠一『マヤ文明を掘る—コパン王国の物語』日本放送出版協会 2007年。
- Andrews, E. Wyllys and William L. Fash *Copán - The History of an Ancient Maya Kingdom*. School of American research press, Santa Fe. 2005.
- Braswell, Geoffrey E. *The Maya and Teotihuacan*. University of Texas Press, Austin, 2003.
- Harrison, Peter D. *The Lords of Tikal - Rulers of an Ancient Maya City*, Thames & Hudson, New York. 1999
- PROARCO (Proyecto Arqueológico Copán) *Arqueología y Conservación en Copán: Investigación y restauración en los grupos 9L-22 y 9L-23 (Complejo arquitectónico Núñez-Chinchilla)* Centro Regional de Investigaciones Arqueológicas (CRIA), Copán Ruinas, 2003.
- Sharer, Robert J. with Loa P. Traxler *The Ancient Maya*. 6th edition., Stanford University Press. California. 2006
- Turner II, B.L., William Johnson, Gail Mahood, Frederick M. Wiseman, B.L. Turner, Jackie Poole "HABITAT Y AGRICULTURA EN LA REGION DE COPAN" *INTRODUCCION A LA ARQUEOLOGIA DE COPAN, HONDURAS TOMO I* pp.35-142, Instituto Hondureño de Antropología e Historia, Tegucigalpa D.C., 1983